

海上レモンの式場

県立錦江湾高等学校 一年

榎田彩夏

とある海岸に変わった檸檬の木があるらしい。海中から空高くまで枝を伸ばした檸檬の木。その木の傍には小さな家があつて、そこに住んでいるおばあさんは毎日、その木の世話をしているらしいよ。

昔、この国が沈みかけた時、あの木は一人の男で植物病の患者だったそう。二人が結ばれるのは、檸檬の実が実ったとき。檸檬の実が彼からのお手紙だって、彼女は笑うんだ。

ゆつたりとした口調で老婆は物語を紡いでいた。不思議な話が終わる頃には手元で帽子が編み終えられていて、その帽子を満足したように眺めていた。

「まあちゃんの帽子、ほら、できたよ」

「おばあちゃんありがとう！ 今日のお話も面白かった！」
今日も緑の葉の下には真っ赤な薔薇が咲き乱れている。

植物病というものは大層昔からあつたそうで、当時の社会は結核のような再興感染症という扱いをしていたの。昔はあ

まり珍しくない病気だったのに完治する術はなくて、寄生された場所、植物との相性等様々な条件によって医者が余命宣告をしていたの。

【幸せ】と聞いて何を思い浮かべる？ 悲しみの先にある喜び、日常のちよつとしたことに関する感激、感謝……人それぞれ感性によって決められる、決して「誰かが制限する義務付けられたもの」ではないと思わない？

そう、彼はその【幸せが義務付けられた国】で生まれたの。可哀想なことに彼は幸せで居続ける事が出来なかつた。これは重罪だ。そう決めたのはその時の政治の実権を握っていた幸福党だったかしら……。

生まれた時から死ぬ時まで、幸せで居続ける事を義務付けられた国。この国が本当に幸せかどうかは誰も決めることができない。そうでしょ？ だって、幸せだと決めるのは周りにじゃなくて本人たちなんだから。

昔のこの国の街中には銀色に鈍く光る、それこそ食人草のような形状の物が沢山隠れていたの。幸せを感じる機械が搭載されていて、通る人の中に脳内に分泌されている脳が幸せだと感じたときに分泌するオキシトシンの量が国の定めた五十という基準を下回る人を見つければその人を食べてしまうように回収する。そして、食べられた人は政府の施設へと送られ、体のどこかに人工的に植物を寄生されてしまう。そんなシステムが昔のこの国には存在していたの。

何もない休日、不幸なことに彼はその機械に食べられてしまったわ。オキシトシンの量が四十八と、五十を下回っていたそうね。通りすがりの人々は「ああ、可哀想に」と呟くけど何処吹く風といった様子で、またすぐに何もなかったかのように社会は回っていったわ。

今日はそんな彼とまあちゃんも知っている、檸檬の世話をするおばあちゃんのお話でもしましょうか。

飲み込まれた僕は機械の中で深い眠りにつき、目が覚めた時には施設内の簡素な独房の中にいた。「ああ、僕はもうすぐ死ぬんだな」他人事のようにボソリと呟いた。静かに誰かの靴音と小さな話し声が独房に響いた。

「君、希望する植物は？」

カンツと一際甲高い音がして顔を上げれば、黒いスーツに身を包んだ看守のような女性が立っていた。赤いピンヒールがもう一度高く啼く。

「特に……」

そんな、自分を殺す植物を自分で選べと言うのか。僕は形状がたい感情に飲み込まれた。

「君、好きな果物は？」

「檸檬です」

「そうか」と彼女は呟いてから独房の前を去っていった。後に知ったがオキシトシンの量が四十五を下回っていない人の

特権として、自分に寄生する植物を選べることになっていた。名前を呼ばれた気がする。視界が反転して、死ぬ日までのカウントダウンの音が重く響きだした。

気づけば僕は家へと帰ってきていた。少し傷む首の後ろの方を鏡で見れば、小さな苗が根を張っていた。背筋を喰むようにじわじわと体が侵食されていく。安定したのか、急激な成長はそこで止まって体が後ろに引っ張られる感じがした。

不思議なことで体の痛みはあまりなく、生活への影響もなさそうだった。立って歩けることを確認すると、喉が渴いていることに気づいた。急いで水をグラス一杯分飲むが物足りない。ようやく喉の渇きが治まった頃には一リットル近く水を飲んでいたら。おそらく、体内の水分が首に寄生した苗に吸われてしまったのだろう。

日が傾き、鳥が鳴く夕暮れ時。近所の家から漂ってくるカレーの香りに腹が鳴り、そういえば今日は何も食べていなかった、と思い出した。冷蔵庫を開け、目についた使えそうなものを手に取り調味料を選んでいる時、「塩」を拒絶していることに気づいた。少し時間が経ち、できた料理は味気ない美味しいとは思えないものだった。

寄生後二十日目

首元の木は成長を止めることなく、日々成長していた。味気ない食事と大量の水分補給にも慣れてきた頃だった。太陽

の光を無性に浴びたくなって、人目も忘れて外に出た。暑いと思っても陰に入りたくないと、日の光を浴び続ける。首の苗が少し重たく感じた頃雨が降り始め、仕方なく家へと帰る。

思い返せば、街中にも植物が寄生した人は沢山いた。老若男女関係なしに、体のどこから植物が生えている。体に葵の花が寄生した少年が歩いていて、車椅子に座る老人の肩からは大きな梨の木が伸びていて、彼はその梨の実を街中で売っていた。またある少女は、足から上半身へと伸びるガーベラの花を、花屋に売り込んでいた。

人々は何も言わずに彼、彼女らに寄生した植物の一部を買っていく。差別的な目をする人もいたが、寄生した植物を買う人々の瞳はスーパールの品物を見る目と同じだった。

僕はこの国がキライド。

当たり前のように人を殺すこの国が、感情に決まりを作った頭のイカれた総理大臣が。ずっと監視され続け、死に行く人に手を差し伸べないアホな国民が。嫌でイヤでどうしようもなかった。幸せであり続けなさい。そうさ、街行く人々の顔は仮面に隠されている。貼り付けた笑顔、偽りの幸せ……何があっても泣くこと、悲しむことは許されない。

とうとう友人が死んだ。体に寄生した梅の木の根が心臓に届いてしまったらしい。木となろうとする彼は薄っすらとした意識の中で、木となっても僕と会話してくれた。彼は、梅の木が朱に染まる春を心待ちにしていた。

でも、花を咲かす前に、彼の意識はなくなった。去年の冬のことだった。

少しづつ木は葉を広げ、根を伸ばし、僕の体は重くなっていく。昨日見たあの少年の体に寄生した葵が枯れかけていた。彼も弱ったように見えたが、街中の人々は彼を居ないものとして誰一人声を掛けない。

「君、水分は？」

そんな彼に声を掛けた勇氣ある人物がいた。リュックサックからペットボトルの水を取り出して、彼の口元に押し付ける。喉が動いて少しづつ、葵も彼も元気になったように見えた。

「ありがとうございます」

少年は澄んだ瞳でどこか遠くを見つめたまま、まっすぐに歩いて行った。

「君は彼の友達なのか？」

空になったペットボトルを捨てながら、遠くから全てを見ていた僕に声を掛けてきた。寄生されてから初めて話しかけてきた人だった。仄かに薔薇の香りがする。

「いえ、ただ昨日も見かけた少年だったので」

「成程、そうだったのか。……君も寄生された身か」

彼女は僕の顔と首元をじっと見つめた。葉を一枚切り取って、興味深そうに日にかざしている。

「檸檬の木か、珍しいな」

彼女の手にした葉がひらひらと落ちる。緑色の若葉はコンクリートの上で少しづつ死んでいくのだろう。切り取られた檸檬の葉が、ゆっくりと死んでいく様はまるで将来の僕のようにだった。

「私は植物病についての研究をしている。よかったら、協力してくれないか？」

鋭い眼差しが、僕の心を打ち抜いた。

地図を頼りに彼女のキャンパスへと向かう。国内でも名の知れた大学の植物園が彼女の庭だった。半透明のドームの向こうに人影を見つけて、植物園の趣のある扉をゆっくりと開ける。

「君、待っていたよ」

植物園というよりは、薔薇園といった所だろう。ドーム状の建物の中央に白い大きな噴水が佇んでいた。床はタイル貼りで木々の中に赤、白、桃、黄の薔薇が咲き乱れていた。

彼女の香りはこの植物園からだ、と確信した。甘すぎない薔薇の香りがより一層花開く。

「君に寄生した檸檬の木の成長はとて早いんだ」

彼女は何かを堪えたように唇を噛んでいた。

「君の脊髄を通る木の根、枝はあと一か月で手足の自由を奪ってしまいかもしれない。骨を蝕みながら、少しづつ脳に細かな根を張り……。一年以内に心臓を喰らうだろうな。伝えるか悩んだが君の為だ。今まで、半月も経たずに手足の自由

を奪われ、意識のあるまま木となってしまった人と話したことがある。彼女の意識は十日しか持たなかった。十日目には心臓に木の根が届いてしまったんだ。君は特別だ。君なら助かるかもしれない」

彼女は僕の腕を取ると、彼女の腹部へと持って行った。ゴツゴツとした人の体の感覚ではない何かがある、そこにあつた。

「私もいつか死ぬ身だ。薔薇の花が咲き乱れたら私は終わりで。それまでに治療薬をずっと作りたかった。今は、自分の為ではなく、君の為に治療薬を作ってあげたい」

彼女は刑罰としてではなく、近所に生えていた薔薇が体に寄生したらしい。両親から見捨てられ、小さい時に祖父母の家に預けられたそう。それから直ぐに幸せを義務付ける国の政治と、病氣と刑罰の区別が付きにくく、死刑であるのに批判しづらい人工的な植物病に疑問を持ち、そんな世界に少しでも対抗し人を助ける為に薬を作ろうと心に決めたという。「今まで、塩分を沢山摂ったり、水を飲まなかったり、日を浴びなかったり……。思いつくことは全てした。でも、体から寄生した植物全てが消えることはなかった。一週間以内には種のある所から新しい芽がでる。この植物園も研究の為にあるんだ」

一輪、一輪、ここの薔薇は花を咲かせたら摘み取られていく。美しい花についた棘に気を付けながら、僕もその作業を手伝った。

「京子先輩！」

白衣を着た彼女より一つ下くらいに見える、おかつぱの女性が沢山の試料を抱えて走って来た。

「その貴方も手伝ってください！」

僕も試薬運びを手伝うことになった。彼女……京子さんは運び込まれた試料を一つ一つ摘み取った薔薇や他の植物、そして僕に寄生した檸檬の葉にかけていく。何かしらの変化を示した物だけを選び抜き、また別な試薬をかける……。作業をしながら、京子さんは昔の話をしてくれた。十歳にもならない頃、水分不足で街中で倒れた時に知らない男の子が声をかけてくれて、今生きていられている話を聞いた時に僕は、京子さんが葵の少年を救った理由が少しだけ見えた気がした。

きつと京子さんには、葵の少年と昔の自分が重なって見えていたのだろう。

「薔薇は簡単な構造で大まかな治療薬に利用できるものは分かった。でも、君のその木はまだ何も変化を示さない」

寄生した植物をしっかりと枯らしてから、体内の種子を取り出す。彼女はそんな計画を立てているみたいだ。

「君の為の薬を作りたいが……」

私の力不足だ。申し訳ない。と頭を下げられた。謝って欲しかった訳でもないのに、僕は狼狽えることしかできなかった。

更に時は流れ、とても暑い日々が続くようになった。

彼女の言う通り、少しずつ自由が奪われていった。まず、首が動かなくなつた。次に体が曲がらなくなり、今日とうとう、腕の自由までもが奪われてしまった。少し、体の痛みも増した気がする。

途方に暮れた僕は、まだ何とか動く足を懸命に働かして、彼女のいる植物園へと向かった。街はクリスマスマスを終えたイルミネーションに彩られていて、夜なのに昼間のように明るく、人々は大通りを行きかっていた。久しぶりに薔薇の香りに包まれ、安心感が僕の居場所のない心を救ってくれた。

「君、その体は……」

彼女は僕が体当たりをして開けた扉を閉め、僕を支えながら園内にあるベンチに座らせた。

「僕、もうダメなのかな……」

最近の僕は弱気だ。少しずつ自由を失い、死期がそこまで来ている感覚がして、遺言を早めに書いてしまった。死までのカウントダウンが残り僅かだと確信してしまう。

「京子さん、僕はいつ、完全に自由を失いますか？」

せめて、脳が生きている間に、脳に木の根が達する前に、自分の自由のきく体の死を知りたい。きつと最後は大きな檸檬の木の一部になるのだろう。いつそのこと、この植物園に骨を埋めたい。死ぬときのことしか考えられないくらい弱気な自分を笑うことしかできない。

「花が……。花が、咲いたら」

京子さんの瞳が歪む。何か言いたそうにしていたが、ぐつと耐えているような、そんな表情に見えてしまった。

「蕾ができたなら、花が咲くまであと十日。君はそれまでにやりたいことをやるべきだ」

京子さんはそれだけ言うと、僕の手を撫でながら静かに、植物園の奥へと消えて行った。

「やりたいこと」

そう言われても浮かぶものはなく、その日は静かに過ごすことにした。

丸一日考えこんだが、やりたいことはたったこれだけだった。

梅になってしまった友人の花が咲く頃だから、彼に会いに行きたい。遠方の家族に手紙を出したい。京子さんの病気が治って欲しい。……僕に希望がなくても、いつか誰かが、この世界を変えてくれるんだ。

パスポート片手に「自由」にお別れを告げる旅へとでた。

見たかった、鉄の機械が監視していない世界というのはとても素晴らしいものだった。

死ぬ前に一度だけでいいから、幸せとか、そういうった感情の制限のない国で数日間だけでも生活できてよかった。きっと、未来のこの国は旅先の国のように、人々が監視し合わない感情も自由な国なんだろう。そうなって欲しい。

旅行してわかったが、どこの国にも病気としての植物病は

あった。

梅になってしまった友人は、白い景色を朱に染め上げていた。早咲きの彼は新年を告げる木として、この地を守るのだろう。朱をすり抜けた光が僕に降り注ぐ。案外、大地に足をつけるのも悪くないかもしれない。そういえば、旅先の国には植物病の患者が自分の将来についてしっかりと考えられる施設があった。

「あなたはどんなみちをえらぶの？」

まだ幼い少女が、施設を見学していた僕に声を掛けた。少しだけ外国語に強いおかげで、何とか少女が何を聞いてきたのかわかった。

「僕はまだ何も決めてないんだ。あと少しで選択の締め切りがきてしまうというのにね」

「わたしはくのにしよくぶつびょうのかんじやさんのためのしよくぶつえんにねをはるわ。おにいさんのくにも、くのしよくぶつえんがあるなら、わたしはそこをおすすめするかな？」

少女が言う植物園なんて、僕の国には存在しない。国営の植物園に根を張ると言っていた彼女の手からは、黄色い彼女の国の国花が全身へと伸びていた。

やっぱり、外国に行ったことは間違いではないな。そう思いながら僕は梅の木……いや、彼に小さな挨拶をした。

「久しぶりだね、元気してた？僕は昨日まで外国に行ってきたんだ。外国には、植物病の患者が将来について考えて、

療養する施設や、植物病の患者の為の国営の植物園があるらしいよ。君はどうしてこの……、僕がキライなこの国の大地に根を張るって決めたんだ？ 体が動かなくなっても意識だけがある状態が人によっては幾年も続くって聞くけど、そんなの僕は嫌だ。だから僕は君とは違う道……。僕だけの道を選ぶよ」

自分の最後まで、自分で決めてしまいたい。

故郷に似た海岸へたどり着く頃には、指先から枝が伸びていた。

人は死ぬ時に走馬灯を見るという。

では、本人の意思で死ぬ……。つまり、自殺する場合は何が見えるのだろう。一瞬で死ぬ場合はないだろうけど、ゆっくりとじわじわ死んでいく、それこそ首吊りや溺死、一酸化炭素中毒死を選択したら、多少の恐怖と生きたいという強い感情が体を支配するのだろう。

僕は別に、自殺願望があるわけでもない。ただ、この体に寄生した忌々しい檸檬の木と、一刻も早くおさらばしたいだけだ。

植物病の治療法のない今、その為には自ら死を選ばなくてはいけないが。

携帯と手紙はあの植物園の薔薇の中。

思い出が詰まったアルバムは今、僕の腕の中にある。

何をするかなんて簡単に想像がつかうだろう？ 愚かな自分が馬鹿馬鹿しい。乾いた笑い声をあげて、悲しいわけじゃないのに流れる涙で瞳を真っ赤にさせながら、海へ身を投げ捨てた。

バシャン！

木の重みで僕の体はどんどん海中へと沈んでいく。ブクブクと口から気泡が水面へと昇っていくのが見えた。こんな時にもならない頃、街中で倒れていた同い年くらいの植物病の女の子を助けたことがあった。……きつと、あの時の女の子が京子さんだ。記憶の中の女の子も微かに薔薇の香りがした気がする。最後の最後に大切なことを思い出せて、自然と笑みが零れた。

なんだ、死の恐怖なんてないじゃないか。遠く見えたあたたかな太陽の光に、静かに手を伸ばした。

人の死は三つあるという。

一つ目は体の自由を失うという死

二つ目は心臓が止まるという死

三つ目は忘れられてしまうという死

彼は一つ目の死を受け入れられなかった。

時の流れはとても早く、彼が亡くなってから約半年が経った。

とある大学の波島京子研究員と助手の成宮桃子が、植物病全般に効く薬を作ったというニュースが世間を騒がしている。治療薬を発表した際、彼女たちは今の国の在り方への疑問を投げかけた。「この国はおかしい」と。

このニュースを見た国の王は嘆いた。信頼していた総理大臣がこの素晴らしい国を崩したと。総理を呼びつけ、目の前で辞表を書かせた。

「お主も一度、感情や行動を制限されてみるべきだ」

何かを訴えるように口を開いた総理に、王は書かせた辞表を投げつけた。そしてすぐに、王に仕える警官が彼に手錠をかけた。

京子は研究所を離れて、国内だけでなく海外まで見て回った。海外にもいる植物病の患者の症例を集める為だ。彼女は檸檬の木の彼を忘れてしまったわけではない。今すぐにでも探したいが、きっと彼はもう死んでしまっている。私が薬を作るのが遅すぎたせいだ。私は彼に救われたというのに、私は彼を救うことができなかった。

彼女は自分を責めていた。

「先輩！ お久しぶりです。電話の件なのですが……」

おかつぱ頭がトレンドマークの桃子が手にした携帯と手紙を京子に手渡した。

「何だろうって思ってた中身を少しだけ見ましたが……。これは先輩が見るべきものです。これ、あの薔薇園の中に隠され

ていました」

手紙を取り出せば、枯れた檸檬の葉が地面へと落ちた。ゆっくりと文字を目で追えば、何故自分が読まないといけないかハッキリと理解できた。残り1%の携帯の充電が見せたのは、どこかの海の写真のロック画面だった。

そして、手紙の最後はこう締めくくられていた。

僕はこの体と自由、人生をこの国への贖物として献上します。

ですが僕の魂は実となり、また日の光を浴びるでしょう。この檸檬を食べていい人は京子さんだけです。貴女が僕のことを見つけてくれたら、僕は僕の心を。いえ、僕は貴女だけの植物になります。話せなくて、こんな形で伝えることになってすみません。僕は本当に馬鹿で、どうしようもない奴です。

最後になりましたが、僕は貴女を恋い慕っていました。そして、僕は自分で死を選びました。だから、貴女が自分自身を責める必要はありません。

最後までいい格好つけたかったなあ……

Pas toon

「バカ野郎……」

京子は悔しそうに呟くと、手紙に書かれたパスワードを打ち込んだ。「充電してください」の文字のあと、プツリと電源

は落ちてしまった。

「ハハッ……」

こんな大がかりなことをしといて充電切れなんて、ホントに彼らしい。

充電が100%になったら、彼に会いに行こう。

「おばあちゃんの話、難しいよ……」

今年で11歳になった真姫は困った顔をしながら、床に座り込んだ。

毎年のようにおばあちゃんが帽子を編みながら、昔話のようないきなりお話を聞かせてくれる。真姫は小さなときから、この時間が大好きだった。

困った顔をした真姫の頭を、編み終えたばかりの帽子が包み込んだ。「まあちゃんによく似合っているよ」と真姫の頭を優しく撫でると、少しだけ遠い目をして微笑んだ。

「まあちゃんにもそのうち、色々わかる日が来るよ」

十数年後、海から伸びる檸檬の木の下で行われた結婚式が、地方紙に小さなニュースとして掲載されて話題になった。

今までずっと一人で檸檬の木の世話をしていた老婆は、地方紙に載った写真の中で幸せそうな笑顔を見せる一家を見ると、一輪の薔薇を手に、安心したように眠りについた。

病院のベッドの横には、摘みたての檸檬が一つ置かれていた。